

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Sept. 30th, 1956. No. 295.

關西大學學報

昭和31年9月 第295号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十一年九月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第二九五号



白馬岳を下る（山岳部）

關西大學學報局

大学経営は各界からの――特に私立大学に於ては――凡ゆるメンバーの秩序ある参加によつて運営されている企業である。企業には常に経費の問題がつきまとうのであるから、大学発展計画を実現して行く為、どの大学でも大学財政の維持に不断の而も懸命の努力をかたむけながら、基金不足に悩んでいるのが現状である。

A black and white portrait of a man with a mustache, wearing a dark suit jacket, a white shirt, and a dark bow tie. The portrait is oval-shaped and has a grainy, high-contrast appearance.

大学発展の基盤とその展望

る現状は、少くとも教育に関心をもつ識者のひとしく危惧しているところである。日本の文化、教育の底が浅いこともかゝる根本原因が解決されていない結果である。官立が私立に比してよりよき成果をあげている事も他の面の理由はあるにしても、大部分その経費の差が大きな原因の一つとなつてゐるのである。何れの大学も最低の経営維持の爲に比較的借りよい銀行、或は焼石に水の如き僅少の額を私学聯盟より借入して経営をつゞけているが、決して健全なる経営状態ではあるまい。大学は古きの故に衰えないと誰が保証し得る。経営があやまれば大学の安定性はぐらつき悔を將來に残すであらう。

大学経営者はこゝに於て明確なる大学政策、教育政

計画が画餅に終る危険がある。現にこの現実によつてかつていのである。

我が国の如く大学教育について認識と熱意のうすい国に於て、高度の学問研究並に教育をすることが如何に困難な仕事であるかを、私立大学の経営にたづさわる人々は常に痛感している所である。教育に対して深い関心と理解をもつてゐる欧米に於てすらも、大学教育のため如何にしてより多くの基金を獲得するかについて、驚くべき程の研究と努力をつとけているかを見て、大学教育をより立派にするには如何に豊富なる資金が入用であるかが判るのである。

日本の私立大学が経営の危機に直面して、如何にすれば最適の経営方式が打ち出せるかと四苦八苦してい

策を打ちたて、発展計画の実現に着手すべきである。どの大学でもそれぞれの特殊性を持つている。この特別事態を考慮に入れて発展計画は樹立さるべきである。

先ず大学当局者は大学発展委員会を早急に作り、このメンバーには理事者、財界、学生の父兄及校友の中から、真に教育に理解と認識とをもつ有力なる人材を集めて構成すべきである。特に理事者に於ては教育に對し眞の理解と深い関心をもち、行政に對する能力、限りなきエネルギーを持ちイニシアチブを取り得る有能なる人物にして和の精神に徹したる人々を揃えるべきだと思ふ。かくしてメンバーの構成が終ると、従来日本では等閑に附されていたと思われる財界との緊

密なる連繫をとることに努力すべきである。日本の全般が教育に又学問研究に理解が少ないとは云え、例えば大学に独自の而も權威ある綜合研究所を設置し強力なるスタッフを揃へ学問研究に全力をあげる限り、日本の財界人は全幅の支持と援助におしみなく与えるであらうことは感知されるのである。外国大学との提携による大学発展も考えなければならぬが、根本的に永續性のある大学発展の基盤の確立には国内の財界との提携が極めて重要だと思われるのである。

特に本学の如く商工都市の大阪に古い歴史をもっている大学は、この点に關して優位に立っている事を認識すべきである。たゞ今日迄かゝる恵まれたる地域にありながらも、發展の度合が少なかつた事は、この地域ですらの社会的知性の向上に対して寄与する度合が少なかつた事も、その原因の一つであらう。

ここに於て大学に關係のある人々は、厳正に自己並に大学それ自体を測定して、大学發展計画を検討し、全幅の協力をなすべきである。比較的豊富と思われる基金をもつ外国の大学に於てすら、ペンシルヴァニア大学の如きは、一、〇〇〇人の寄附懇請委員をもつてゐると云われる事実を他山の石とすべきであらう。

従来名譽職的存在であつた大学の評議員も、この大学發展委員會のメンバーとして含まるべきであつて、眞の意味に於て大学評議員の責任と活動分野は大学發展の爲には実に大きいのである。評議員会も大学發展の爲には従来とは異つた活動が要請されるのである。

かくの如く、大学発展の為に色々の角度から検討の上計画を打ち立て、理想的な大学への道を前進又前進をつづけ、社会、国家、民族、更に人類の為に役立つより優秀なる人材をより多く育て上げて行く大学の使命ほど貴いものはないと考える。この貴く高き使命を遂行して行く為に「豊富な基金」を集めることが、大学発展の基盤を強固ならしむる唯一の道であることを重ねて強調する。

夏期調査研究報告

第三回 島根大學 共同隠岐文化綜合調査

(考古学班報告) 末 永 雅 雄

過去二ヶ年の予備調査の資料に基いて、今年からは本格的調査の段階にはいった。

一、編成

団 長	教授 原田 虎男 (島大)
副団長	教授 三木 治 (關大)
企 劃	教授 今石二三雄 (島大)
第一班	教授 原 弘二郎 (關大)
考古学	助教 山本 清 (島大)
第二班	教授 末永 雅雄 (關大)
歴史学	教授 山岡 源市 (島大)
講師	内藤 正中 (島大)
教授	横田 健一 (關大)
講師	有坂 隆道 (〃)
助手	津川 正幸 (〃)
第三班	教授 高橋 盛孝 (關大)
民俗学	教授 井上吉次郎 (〃)
第四班	教授 廣戸 淳 (島大)
国語・文学	

第五班 地理学 教授 草光 繁 (島大)
考古学班記録 調査期間 昭和三十一年七月十八日—八月七日

關西大學班のうち一部は十六日大阪出發その他は七月十八日午前九時五十分大阪発「いずも」号で出發午後五時十分米子着こゝで一部合流。六時境港着。全員集結を終り十一時隠岐丸に乗船十九日朝西郷港着。高梨旅館で朝食の後各班行動を開始。

【中村組紋式遺跡の調査】

七月十九日 晴 酷暑 八時西郷港。朝食後飯ノ山横穴の実測。歴史班の一部同行午後三時半周告郡中村港に向う。六時半過到着。学生は山本助教援引卒中村公民館で合宿

島大学生 門脇・蓮岡・東森
関大学生 亥野・岡・石野・勝部・

樋口・北島・藤田・出水
・村津
明朝より起床六時現地七時三十分、正午より二時半まで休憩六時まで調査作業と定める。

七月二十日 午前雨 午後晴 雨の為文化財保護法の講義、午後二時半より調査地に至る。発掘地とその下方の畑の測量。写真撮影。地主小沢清二郎氏。この調査地は昨年の予備調査にあたり藤田一枝氏の報告があり、現地調査の際縄紋式土器黒耀石の石屑などの包含層を見、調査地と定めた。

遺跡は東面して派生する台地。すぐ海に臨む。発掘地点は南面傾斜の畑地主要部の測量終了とともに発掘着手、七月二十一日東西二十一米、幅一米中央で交叉した発掘溝をとる。着手して暫くのうちに包含層がわかる。西方になるに随い包含層が厚くなる傾向が見えはじめる。

七月二十一日 晴 蔽石が多数に発掘される。海岸で適当な塊石を採集して使用したものであろう。その中にはきれいに磨琢されたもの、打痕のあるもの、縄紋式土器破片・底部など。弥生式らしい破片が出る。種々の遺物のうち蔽石について考えさせられるものがある。

七月二十三日 曇 遺物の出土状態は前日と大差ないが包含層は南に向つて次第に傾斜し厚くなる。黒耀石の石屑が多数に検出される。この遺跡と住居の位置について考えさせられる。つまりこの台地のこれより上方に住居があつて、いま発掘の場所は南側中腹に位置した包含層であるらしい。岡、新子二名到着。

七月二十四日 晴 黒耀石以外にサヌカイト・砂岩?なども少しある。縄紋式土器包含の上層に土師器の壺を検出。縄紋式土器は後期の終りか晩期の様に見える。今夜村の中学校で調査の報告講演会を開く。

七月二十五日 晴 朝八時中村乗船十一時西郷港。三時半西郷発バスで加茂着。区長橋本氏・校長吉見氏等に迎えられる。学生は公民館、山本氏と私は吉見氏の校長宿舎に泊る。きょうより島大学生佐々木君参加し蓮岡君は關大学生石野君と中村遺跡整理の為残留。

【加茂船島古墳群の調査】

七月二十六日 晴 酷暑 朝八時船で目的地へ。慰霊祭の為神宮松浦氏同乗。加茂の関係者橋本区長、漁業組合長橋本鉄千代氏外数氏同行。式終了後学生を四ヶ班に分けて一班三人で古墳各一基、一班は測量。古墳は円墳約二十が二つの丘陵上にある。丘陵は西方から東方に派生し、加茂湾の景勝に臨み、古墳分布の重点は稜線上にある。南面傾斜に若干北面傾斜にはないらしい。あつても極く少量のようである。

【調査班】亥野班―東森・樋口 岡班
―佐々木・北島 結城班―藤田・出水
測量班―門脇・勝部・村津（のちに村津
は結城と交代） 外に隠岐水産高等学校生
徒野津和夫・野津良一君参加。

古墳は丘陵の斜面にあるため、下方
から測れば高さ二―三米はあるが上方
からは僅かに一米足らず、外形は円形
で径五―七米が普通である。盗掘され
て枕材の石の散乱するものもある。

七月二十七日 晴 酷暑 海に臨んで通
風はよいが木蔭がなく太陽の直射を受
ける。昨年の予備調査のときほどに封
土が乾燥していないがかなり労力を要
する。学生達は中村の発掘以来誰れも
日焦げが眼立つて来た。

古墳の稜線上に残るもので封土の中
心から計測してゆくと一―一二米間
隔になる。封土が全くなかった古墳
も大体これに準じたのではないと思
う。

古墳の位置を確認するために、白い
標旗を立てる。旗は海風にたえずハタ
ハタしている。きょうから野津和夫君
のみ参加藤田一枝氏が古墳上方の丘陵
で黒耀石の破片を採集された。隠岐高
校の田中豊治氏に黒耀石の分布を調べ
て頂いたところこの附近にあつてよい
と云う。

七月二十八日 晴 酷暑 盗掘されてい
ない古墳でも遺物が少く時には全くな

いものもある。古墳の構造は海岸から
手頃な長方形の板石をとつて来て、予
めつくつた土の上に箱形に並べ、死者
を入れて板石で蓋をし、その上に若干
の扁平な板石で間隙を塞ぐから古墳に
よつては亀甲形になるものもある。よ
ほどのものでない限り底石を敷かな
い。特色のある箱式棺と云える。棺は
長方形で稜線の中軸に合致したものが
多いから東枕に葬つたと見られ、棺の
構造で東方が撥形に開くものもあつ
た（これは頭部の位置）。

三名田・二宮君歴史班より到着石野
・蓮岡君中村の整理を終り帰着。



西郷町加茂古墳群第16号墳

七月二十九日 晴 酷暑 関野班発掘の
古墳で棺の石の配列順序のわかるもの
の、東方でやゝ広くなる状態のはつき
りした構造が知られた。今日まで調査
の古墳の埋め戻しを初める。すでに盗
掘された古墳についてもその構造を知
るために調査をする。

測量班は地域が広いのと、地形の傾

斜が急なためになかなか困難がある。
村津君と結城君を交替させる。

今夜加茂町漁業組合楼上で調査報告
会を開き併せてこの地方の出土品を見
る。

七月卅日 晴 酷暑 七基の円墳調査を
終る。この中三基は未発掘であつたが
二基は石を並べた石棺で底石がない。

一基は全然石を使用しないが遺物は鉄
の直刀一口のみ、その他は土器破片を
封土中に検出した程度。この底石のな
い方法は、最も簡素な組合式石棺であ
ると見られるから、特色のあるものと
して地名を冠して「船島式箱式石棺」
と命名した。附近には石が豊富である
から石を使用することは近畿地方であ
れば中級以上の古墳の構造であるにも
拘わらず、副葬品の貧弱な点について
かなり考えさせられるものがある。

今夜加茂町で慰労会を催して頂い
た。加茂より西郷へ移動。

七月卅一日 晴 酷暑 山本氏と私は朝
九時廿分バスで西郷へ。十一時から西
郷町で調査報告の会。夜八時から同
じ。学生は夕方到着。但し測量班は残
留し、なお附近の先史遺跡の調査の為
に石野君も残る。測量終了とともに残
りの古墳整理をする。

【前方後円墳の調査】
八月一日 晴 酷暑 朝八時半平（エイ）
神社境内に前方後円墳らしいもののあ

ることを田中豊治氏から連絡があつた
のでそれを見にゆく。後期の方後円
墳で長径五二米低い台地上に西面す
る。クビレ部の南側に横穴式石室があ
るが大部分が破壊され、奥壁の一部と
東壁の積石が残るに過ぎない。しかし
埴輪円筒もあり、大形の割石をもつて
する葺石が眼立つている。大形の須恵
器も封土上に検出せられたから隠岐の
古墳にもかなりな前方後円墳の存在が
確認された。附近の子守神社の境内も
前方後円墳の疑がある。もしそうであ
れば平神社よりも大きい。また玉若酢
神社後方にも前方後円墳と認むべきも
のが早く山本助教教授によつて報告せら
れている。こうして玉若酢神社、国府
原（国府所在地と伝承）などに前方後円墳
のあることは将来の研究に関心を深め
る。

【権徳寺跡の調査】

ついでに権徳寺跡に到る。（地主堤浪
市氏）隠岐調査最後の調査予定地であ
る。現地は東面の平地。愛宕山を前に
し西郷湾の一部が見える、景勝の地を
占めている。今回われわれの目的は一
部試掘程度であるから、測量に重点を
置く。

奈良時代の蓮華文瓦当、径七五―八
五 cm の円形造り出しのある礎石が
数個あり、古瓦は奈良時代盛期の形式
を示す大形で、興福寺・東大寺の主要

建築に使用するものに比較しても遜色はない。

夜加茂の残留学生より連絡があり整理の古墳から合葬棺と勾玉・鉄鏃・直刀・貝殻の副葬を報告して来た。

別に里見慶三氏から飯の山横穴の向い山で横穴を検出したこと、その附近で畦曹土採取中に発掘の須恵器を宿舎(高製)に送付された。土器は奈良時代に近いものと観察され、長頸壺・俵壺・台付壺・皿など多数である。

八月二日 晴 酷暑 急に調査線が拡大され権徳寺跡・加茂船島・川原田横穴の三ヶ所を調査することとなった。

権徳寺は隠岐では重要な意義をもつものと判断した。船島古墳は合葬であつて、これまた軽視出来ない。川原田横穴は対岸の飯の山横穴に壁画があるから、その究明の為に大切である。船島は残留者によつて、川原田は岡・北島両君を派遣しその他は権徳寺跡に集中した。

権徳寺跡は礎石の裏込めの砂利らしいものを知り得た。礎石のあつたところで一個の礎石を斜位に立てられていた傍を発掘して瓦礫を固めた部分を検出したのは恐らく裏込であると思われる。これを手懸りに今秋山本助教教授が再び調査する。

八月三日 晴 酷暑 権徳寺の測量一応終る。寺跡と思われるところは南北七三米・東西四六米、東に向つて緩やかな傾斜をもつた平地であつて、その広

さ地形ともに奈良附近の古い寺跡に共通した感じである。この寺跡は簡単に究明することは出来ないが重視してよい。調査は予定通り終了。

【藤田氏蒐集資料の調査】

八月四日 晴 酷暑 西郷町藤田氏の蒐集資料調査。一昨年以來継続して来たが、今年で完結するため中版の乾板による写真と小形写真で補足、山本氏と共同で進める。

学生の一部は国分寺の見学。船島古墳現地より連絡一応終了

八月五日 朝一時雨 午後酷暑 藤原氏の資料調査続行。学生の一部は昨日と交替して国分寺見学、その他は資料調査。夕方川原田横穴を調査、里見氏同行。この横穴はすでに四個が早く破壊



吉岡郡中村大字湊建枝式遺跡の発掘

せられていた。今後里見産業株式会社によつて畦曹土が採取せられるから、逐次検出されることであろう。特に藤田一枝氏に山本助教教授との連絡を密にして頂くよう依頼する。

八月六日 晴 酷暑 午前藤田氏資料調査続行。午後関係各方面に挨拶。学生は引揚げ準備。船島古墳に残留学生帰着。夜一同会食。九時乗船(オ二隠岐丸)西郷町の諸氏に見送つて頂いて離島。海上やゝ風強く船体の動揺はかなり激しかった。

八月七日 晴 酷暑 朝六時境港着、島大東森君こゝから帰る。その他七時半松江着。島大今石教授出迎われる。上陸とともに解散。

かように今年の調査は一、縄紋式遺跡二、古墳、三、寺跡、四、藤田氏蒐集資料の調査によつて島後における考古学的事象への検討を実証によつて進めることが目的であつた。幸にしてそれぞれは一連の文化現象として取扱ひうる基盤をなした。

以上第三回隠岐調査に参加した考古学班の行動を日記によつてその概要を報告した。今年の考古学班は三週間に亘りその間殆ど野外行動であり、しかも酷暑下の重労働において学生諸君は極めて明朗に研

究に従事した。将来の両大学の提携においても、また学生諸君個人の研究についても期待すべきものの多いことは云うまでもない。

今年の調査が、予期以上の成果を得たのも現地関係者諸氏の与えられた好意ある協力と、島根大学の精密な企劃と参加学生諸君の真摯な研究態度によることである。記してもつて関係諸氏に深く感謝する次第である。

参加者体重表作成は調査期間の半分の時期からであるが出発に際し学生の健康状態を調べて酷暑下の調査に堪えるもののみ考古学班に参加した。

隠岐調査考古学班参加關西大學学生体重表 単位斤			
(昭和三十一年七月十八日～八月七日)			
七月廿九日加茂で計量体重		八月八日帰着後体重	
1～(I)	19,200	～	18,500 (-700)
2～(S)	17,500	～	17,700 (+200)
3～(U)	17,300	～	17,800 (+500)
4～(I)	17,000	～	16,500 (-500)
5～(D)	15,800	～	16,200 (+400)
6～(N)	15,600	～	15,300 (-300)
7～(O)	15,530	～	15,900 (+370)
8～(K)	15,400	～	15,700 (+300)
9～(M)	14,300	～	14,500 (+200)
10～(F)	14,200	～	14,100 (-100)
11～(H)	14,000	～	14,200 (+200)
12～(K)	13,250	～	13,600 (+350)
13～(M)	11,800	～	12,000 (+200)

体重 { 増加～9
減少～4

昭和三十一年八月十五日。(文学部教授・文博)

第三回 島根大學 共同隠岐文化綜合調査

(社会・民俗学班報告) 井上吉次郎

この調査も第三年を迎え、今年(三十一年)は、去年より一段と規模が大きくなった。毎日新聞からも全面的な援助を得た。七月十八日午後十一時、宵も過ぎて町の灯も薄ボンヤリして来たころ、夜見浜頭の境港埠頭に集った両大学からの同勢は二十人を越す多数で、若い学生達は、はち切れる精力をみなぎらせ勢揃いした。夏の夜船は楽しい。本夏新参加の国語班吉永教授が土部講師と一緒に乗り込んだ。隠岐の国語調査をもう何度か手がけている島大の廣戸教授が都合で島に來られないので打合せのため前日來同教授を訪れたもの。地理学の島大内藤講師も新参加であるが、同方面の各種調査は、社会学の山岡教授と共に年來続行、業績を上げている。關大側新参加でも歴史学の有坂講師と経済史の津川助手は、文書の読解力において已に名あり、特に若い精力と根気が物をいうし、今年は大いに進捗することを思わせた。

この調査も第三年を迎え、今年(三十一年)は、去年より一段と規模が大きくなった。毎日新聞からも全面的な援助を得た。七月十八日午後十一時、宵も過ぎて町の灯も薄ボンヤリして来たころ、夜見浜頭の境港埠頭に集った両大学からの同勢は二十人を越す多数で、若い学生達は、はち切れる精力をみなぎらせ勢揃いした。夏の夜船は楽しい。本夏新参加の国語班吉永教授が土部講師と一緒に乗り込んだ。隠岐の国語調査をもう何度か手がけている島大の廣戸教授が都合で島に來られないので打合せのため前日來同教授を訪れたもの。地理学の島大内藤講師も新参加であるが、同方面の各種調査は、社会学の山岡教授と共に年來続行、業績を上げている。關大側新参加でも歴史学の有坂講師と経済史の津川助手は、文書の読解力において已に名あり、特に若い精力と根気が物をいうし、今年は大いに進捗することを思わせた。



玉若神社

一行が中村の縄文遺跡調査を終えて、また舟で帰る時に、我々も小艇で「釜」まで行った海上すれ違い、ハンカチ振つたのが、あちらで末永さんを見るた一回の機会だった。われわれは、釜を最後に「島後」を引揚げたが、末永隊は、な

おずつと島後に止まり、「舟島古墳」から「甲の原寺趾」の調査を遂げ、七月十八日から八月七日までという長い期間に亘つて、真夏の海島で、炎天下、発掘調査の作業をやつた。末永氏は天下に知られた考古学研究の猛者で、炎天下も物としない、山本さんも勞らず柔軟だが強い、殊に末永教授の学生訓練は熱誠で無

駄を知らない。強将の下弱卒は居れない。今夏の収穫がどんなに大きかつたかは実績が目の前にみせる。

末永一行が発動機音と共に消えた、いつの間にか島大山岡教授の姿も宿からみられなくなつた。山岡さんの農漁村の実証的調査研究は報告や著述で学界一部に熟知されている。本綜合調査においても重要な部分を占める業績をみせると期待される。

我々は西郷町目貫の元船主廻船問屋「藏屋」高梨氏を訪れ、豊富に藏している「文書」や写本類をみせて貰つた。西郷港は所謂西廻り廻船路の隠岐における主要港中の主要港であるから、藏屋に残る記録に我々は示唆されるところ多大だった。国語班は十九日即夜活動開始、「東郷村」で老爺老嫗を集め、歌謡俗話の記録を取つた。調査は学童生徒にも及んだ。

翌二十日は、横田、高橋、吉永、井上有坂、土部、津川、東郷その他大学院、学部学生と第二、三、四班勢揃いで、島後の最深部「五箇村」入りした。大字郡に隠岐一の宮水若酢神社が鎮座する。歴史班は神主さん方へ昼も晩も詰めかけ取材した。国語班は、ここでも記録をとつた。五箇村の海に及ぶところ隠岐の北端で浪荒い日本海に直面する。この海岸に自生する榎の木は特別良質の楮皮で出雲

石見の製紙家へ移出される。そのあたりの入江である「福浦」は往年の船着場で北面するだけに緊急の避難港だった。

廿一日、一行は「都万」に向い、懸案の「高田明神縁起巻」を写真に収めた。有坂氏大車輪の努力だった。学生諸君も実によく働いた。作業は老先生方の「口」で成らず、若人の「手」で捗つて行く。国語班は「都万」の夜にも記録を上げた。

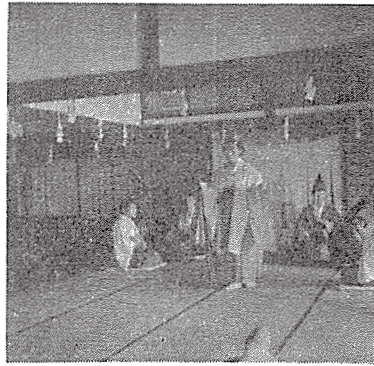
廿二日、「隠岐丸」で「島前」に渡り深更別府に上陸。

二十三日午前中は黒木村役場の「古文書」と黒木村字大山脇にある「船宿帳」を写し取るに傍目をふる暇もなかつた。この「御船客控帳」は、大山脇に残る「元問屋」といわれる旧時代に「回船問屋兼船宿」だった木村家に保存されている取扱つた船舶のメモであるが、萬治二年から大正十五年に至る二百六十七年間に亘る記録であるから、極く簡単な書記ながら大いに物をいつてる含著あり、西廻り回船路について示唆するところ多大である。隠岐高校の田中豊治氏は勝れた研究家であるが、夙に、この帳面に着目し、卓抜な見解を発表している。

焼火山は、毎年登る目標の山であるが、廿三日午後登山、その夜を徹してお祭をみた。

深夜から払曉にかけてお神楽がある。

遂に睡魔に取つかれ布団なき畳の上に転寝してしまつた不覚者には翌「御縁」の朝、縁あつてか前夜残した曲目を見物出来た。無論、深更はの暗い燈火の下にみる古楽に限るとはいえるが、「岩戸」のような名題物が翌朝廻りになつてたから、山の朝にみる神楽にも、なかなかの味があつた。高橋さんは、これ一つに隠岐に來たほどの喜び方で、夜も朝も熱心に、このシヤマンみたいな調子の神楽に



神楽の御社の火焼

悦に入つていた。この楽人は、特定神社に附属するものでなく、受領名を持つ五家が隠岐にあり、その人達で「座」が出来て、「お祭り」に買われて行く組織になつてゐる。神楽をみる間中も、一行誰も手を休めず、山の古記録を片つ端から写し取る勉強振りは頼もしい限りだつた。

国語班は、ここでサヨナラして、境に



八百杉の神社の若玉

向い帰つて行つた。残りは、また西郷に戻つて、更に山高く海を俯瞰する「釜村」の佐々木氏方に赴いた。「佐々木文書」は昨年来ねらひの的である。殊に今年是有坂、津川の腕を揃えて、学生大勢小脇に、これと取つ組む態勢である。「釜」は山の中に十幾戸で部落を成す小字であるが、この庄屋家佐々木氏の由緒は古い。村の田も畑も山もみな佐々木家に所有されて一村名子の形で近世に及んだものらしい。一行同勢十幾名泊り込んで余裕綽々たる「隠岐造り」の典型的大邸宅には、「戦後住宅」を見慣れた眼のオツ魂消るばかりである。我々は、上の間八畳、下の間十一畳の二間ぶつ通し占領し、書類を一杯に拡げて、二昼夜半、読む、書く、写すに明け暮らした。両室に四尺の櫓あつてスス丸竹二本渡している。その前が内庭で枝折戸で外庭に通じる。庭にある柿の古木ではセミが鳴いてた。まだヒグラシではなからう。

(文学部教授)

(8頁よりつづく)

分大学における日本商業学会総会及び研究会に出席。

◇短期大学部太田鶏一教授は五月二十一日より二十五日まで日本学術会館における日本学術振興会カーメッツト研究委員会に出席。

◇文学部井上吉次郎教授は五月二十四日より二十六日まで明治大学における日本新聞学会に出席。

◇商学部今西庄次郎教授、経済学部越後和典、鶴島雪嶺両専任講師、短期大学部宇田米夫教授は五月二十五日より二十八日まで横浜大学における日本経済政策学会に出席。

◇経済学部矢口孝次郎、鐙方貞亮両教授荒井政治、東井正美両助教授、津川正幸助手、文学部魚澄惣五郎教授は五月二十五日より二十九日まで名古屋大学における社会経済史学会大会に出席。

◇商学部植野郁太教授、酒井文雄、河合信夫両専任講師、末政芳信、清水宗一両助手は五月三十一日より六月二日まで明治大学における日本会計研究学会に出席。

◇文学部三木治教授、小方厚彦専任講師は、五月三十一日から六月四日まで早稲田大学における日本フランス語学会、学習院大学における日本フランス文学会に出席。

◇商学部河野稔教授、高堂俊彌専任講師経済学部佐藤博助手は五月三十一日から六月四日まで早稲田大学における社会政策学会幹事会に出席。

◇経済学部森川太郎教授、商学部板橋菊松教授、高本昇専任講師、上田昭三助手は、六月二日から五日まで明治大学における金融学会春季大会に出席。

出版物

◇文学部吉永登教授は立命館大学北川茂夫教授と共同で「日本古代の政治と文学」を青木書店から発行(A5・三一〇頁 価四五〇円)。

学界論議の焦点となつてゐる日本古代国家の成立と古代天皇制の問題を、白鳳期の歴史と文学との二面から究明した数氏の数篇の論文からなつていて、本学の横田健一教授(文学部)も一篇を寄せてゐる。

昭和三十一年九月三十日発行

關西大學學報 第二九五號

大阪府大淀区長柄中通二丁目一二番地

編集兼 久井 忠 雄

大坂市北區川崎町三八

印刷所 株式会社 ナニワ印刷所

電話(35)七二七一番

電話(35)七二八〇番

發行所 關西大學學報局

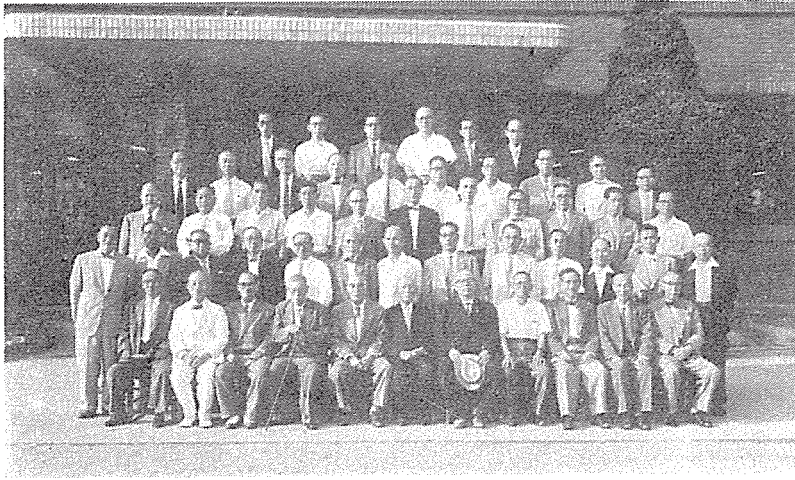
電話(35)二〇七二番

振替 大阪二六七二番

学内報

臨時評議員会

學校法人關西大學寄附行為第十九条第三項前段に基いて、九月三日（月）午後三時より天六学舎において臨時評議員会



臨時評議員会記念撮影（九月三日天六学舎）

を開催。昭和三十一年度學校法人關西大學本会計収支補正予算、昭和三十一年度學校法人關西大學第一特別会計中事業生命保険補正予算の承認に関する件、學校法人關西大學寄附行為改正に関する件、並びに千里山学舎第二運動場建設に伴う本学所有地の一部と他人所有地との交換地変更に関する件等につき審議、これを可決し、その後天六学舎体育館建築竣工状況及び千里山第二グラウンド並に第三学舎工事状況を視察した。

出席者（敬称略・イロハ順）

岩本公夫 今井康兼 今西庄次郎 池田信之助 春原源太郎 西尾專太郎 西村治三郎 西山四郎 西本寛一 戸根泰雄 大石雄一郎 大月伸 大島武夫 脇野徳三郎 河村宜介 桂忠雄 神宅賀壽恵 神屋敷民蔵 桧本信雄 寒川喜一 四辻詮 高垣善一 武田蔵之助 竹澤喜代治 内藤正剛 中務平吉 中谷敬壽 長柄金吾 浪江源治 村尾静明 矢野文雄 矢口家治 保井剛一 山崎敬義 松原藤由政井武 江里口春志 阿部甚吉 明石三郎 澤村榮治 木谷宰三 木村健助 水谷揆一 三島律夫 白川朋吉 下條小野右衛門 平井三朗 久井忠雄 久松鹿治 森川

人事移動

太郎 関豊馬 角田好太郎

昭和三十一年七月一日

学長事務代行を命ずる

同 六月三十日 教授 森川 太郎

願により短期大学部長を解く

同 六月三十日 教授 佐伯 三郎

任期満了につき短期大学部長代理を解く

同 六月三十日 教授 富山 忠三

任期満了につき短期大学部学生部長を解く

同 七月一日 教授 山口 辰雄

短期大学部長を命ずる

同 七月一日 教授 河村 宜介

短期大学部長代理を命ずる

同 七月一日 教授 山口 辰雄

短期大学部学生部長を命ずる

同 六月一日 教授 角田 文雄

再任を命ずる

同 七月八日 助手 名取 榮史

再任を命ずる

同 八月一日 助手 來住 哲二

本大学助手に任じ文学部勤務を命ずる

同 八月一日 助手 東郷富規子

本大学助手に任じ文学部勤務を命ずる

同 八月一日 助手 前原 昌仁

再任を命ずる

同 八月一日 助手 神保 一郎

教授の諸活動

学会出張

◇文学部藤本勝次専任講師は五月十一日より十五日まで早稲田大学における歴史学会に出席。

◇商学部河村宜介教授、河村信一講師は五月十一日より十六日まで福島大学における商品学会全国大会に出席。

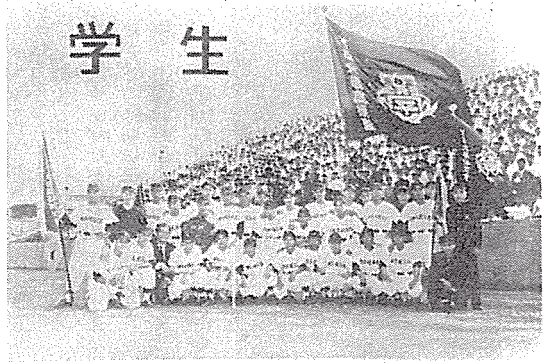
◇短期大学部角田文雄教授は五月十七日より二十一日まで九州大学における日本英文学会、九大英文学会に出席。

◇文学部原弘二郎教授、秋山博愛助教授は五月十七日より二十一日まで東京大学における日本西洋史学会に出席。

◇文学部根本金次郎、堀正人、進藤浩二郎、山本榮一郎、山口辰雄各教授は五月十八日より二十一日まで九州大学における日本英文学会に出席。

◇商学部今西庄次郎、山崎紀男、富山忠三各教授、鯉江城夫助教授、來住哲二助手は五月十九日より二十四日まで大（7頁につづく）

学生



野球全国制覇 待望の夢実現!!

第五回全日本大学野球選手権大会は、二十三日から二十七日迄五日間全国十代表が参加して神宮球場で行われた。本学は、村山投手、灘波選手の快投快打やこの大会の為合宿練習まで行つた異常な全ナインの斗志に、第一日は東北学院を完封、十四・三振を奪い、攻めては灘波の本塁打等によつて七点を上げて二回戦を勝ち進み、準決勝では東京六大学リーグの優勝校早大を三回、六回に定評のあるエース木村投手をノックアウトして五点、守つては早大の打者を寄せつけずまつたくの完勝をなし、二十七日(月)

全国制覇の野球部ナイン

の優勝戦に近大、西南学院を破つた日大と対戦、連戦連投の村山投手の快投と日大島津投手の高調なピッチングで投手戦となり、四回表先取点を許したがその裏一点、六回好打灘波君のヒットとピンチヒッター竹内君の堂々の三塁打で一点を取り、過去四回東京六大学リーグの優勝校に奪われていた王座を初めて関西へ持ち帰り、ここに全国制覇の夢を実現、全日本大学選手権に初優勝を成しとげた。

記録

八月二十三日	於神宮球場
関大	0 0 0 1 0 2 0 2 2 7
東北学院	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
二十六日	
早大	0 0 0 0 0 0 0 1 0 1
関大	0 0 3 0 0 2 0 0 A 5
二十七日	
日大	0 0 0 1 0 0 0 0 0 1
関大	0 0 0 1 0 1 0 0 A 2

中島選手走幅に好記録

第二十四回近畿陸上選手権大会は九月二日午前十時半から西京極競技場で行われ、本学から中島、清水両選手が出場、全般的に低調のなかで中島選手は走幅跳に七米二十を記録し、大会唯一の好記録を作つた。

記録(本学関係のみ)

三段跳	①中島 14米73
走幅跳	①中島 7米20
砲丸投	②清水

於西京極

ボクシング部

全関西アマチュア・ボクシング選手権

大会は、全日本選手権・オリンピック最終予選を兼ねた予選として、七月二十七日午後六時大阪府立体育館に於て挙行された。

本学は、牧・天木・鳥羽・清水、小原の各選手が出場、全試合に熱戦を展開しフライ級牧選手、バンタム級天木選手が優勝の栄冠を獲得した。

記録(決勝記録のみ)

於大阪体育館

牧(関大) 判定 虎野(関学)

関学虎野選手は全ラウンド攻撃に出たが、本学牧選手はこれを巧みなスピリング・タツキング・ウィビングでこれを避け、焦つて出る虎野の右左フックを好打し快勝した

バンタム級

天木(関大) 判定 梶田(同大)

春のリーグ戦で負けていた天木選手はこの一戦にフアイトをかけ、一・二回は互格に戦いかい最終回接近して左右のショートフックを連打し僅差で天木の優勝決定

ライト・ウェルター級

盛山(立命) 判定 清水(関大)

水泳部

第三十三回関西学生選手権水上競技大会は九月一、二両日大阪プールに於て行われた。

本学の優勝種目は宮地選手の五十米、百米背泳のみで振わず、第四位にとどまつた。

記録(本学関係のみ)

五十米背泳	①宮地 32秒
百米バタ	②猿橋
百米背泳	①宮地 1分0秒4 (大会新)
二百米リレー	③関大

於大阪プール

英語会話研究会

七月一日より一週間高知地方で合宿し城西中学、土佐中学、土佐高校、追手前高校等の授業参観、語学の研究発表(教育実習)、高知大学・高知女子大学等と英語討論会、土佐方言の研究等を行い、多くの収穫を得た。

奄美大島を実態調査

政治学研究部、社会学研究部は合同で、七月二十一日より二十日間奄美大島で、



奄美大島調査の学生

が滋る常夏の奄美大島を実態調査の為訪れ昭和二十九年に日本へ復帰を中心問題として、軍政下に於ける行政の变革、犯罪統計とその対策、労働組合運動、経済状態等を調査した。

当地では河内判事(本学先輩・奄美大島地方裁判所)、官庁、有識者、一般住民の助力により大きな成果を得た。

山岳部 特集

踏破した山道か



穂高岳周辺で合宿

昭和三十一年度夏山行動は例年通り北アルプスの穂高岳周辺で七月十五日から八月三日迄、岩登り、雪溪技術等の訓練、穂高岳・白馬岳間の約百軒の徒走を



六百米の大岩壁 屏風岩の偉容

行つた。

目指す白馬岳は指呼の間



七月十五日大阪出発、十六日早朝松本着、島々から上高地まで徳本峠を越えて三十軒の行程夕刻岩魚留着、十七日大雨の中奥上高地徳沢園着ベースキャンプを張る。十八日各隊に分れ行動、第一隊は新人十五名で約百貫の荷を槍ヶ岳へ荷上げ、第二隊二名、明神岳東壁へ、第三隊二名、明神主稜を廻つて奥又白谷へ、第四隊二名、積雪期登路偵察のため西穂高方面へ、第五隊三名、中畑より奥又白の池へ十九日、前穂高四峯フェイス（四百米の大岩壁）の登攀、第四隊は穂高屏風岩（六百米の岩壁）登攀、二十日、全員帰幕。二十一日

徳沢園のベースキャンプに憩う



焼岳の駿足登山、二十二日ベースを横尾に移し、二十三日雨で停滞、二十四日雨の中北穂高岳へ、二十五日いよいよ最後の仕上げ縦走に移り、約十貫の荷を背に北穂高へ、頂上より各隊に分れて出発。キレットの左側は鳥も通わぬ滝谷と云われた難場、やがてガスの間より槍ヶ岳を望む、硫黄沢を乗越えテントを張る、二十六日残雪と花鳥の驚羽岳を過ぎ赤岳にはいる、二十七日真暗闇の中出発。エンボ岩、天然の庭園エンボの池を過ぎ残雪の多い赤牛岳へ、二十八日森林帯で苔が木にぶら下る中を抜け南沢岳に登り不動岳に至る、二

十九日駒草が咲く山を通り針の木へ、大変寒い、三十日冷地、三十一日白岳、出発点槍穂高は小さく雲の中に見える、八月一日残雪と池と花畑の夢の別天地天狗の池に昼頃つく。二日池に名残りを惜んで出発、いよいよ最後の白馬岳に登る、槍ヶ岳は遠く、剣岳も南のあなたに見える。二十日間努力の結果白馬岳に到り喜びと共に学歌を歌い、そして白馬大地へ下る、最後のテントをここに定め、夜キャプファイアを囲む、三日今期の夏山も無事成功のうちに終り、北アルプスの山々を後にして猛暑の大阪へ着く。

苦しみの中の喜び





校 友 バ ッ チ

校

友

西宮支部定時總會

七月十四日(土)午後六時から西宮市民会館で本年度定時總會を開催。堀正人教授の講演の後、大学の近況並に学生生活を写した映画の観賞をしたのち会を閉じた。

出席者
大学側
久井専務理事 堀教授
神戸支部
山崎敬義 難波方
西宮支部



西宮支部定時總會

箕面支部発会

七月二十二日(日)午後三時より箕面町文化会館で発会式を開催。母校から矢野



箕面支部発会

常務監事、水谷撥一先生が出席。来賓として箕面町長、町会議長、教育委員長を迎え、出席会員は四十名の多数であった。先ず準備委員から設立経過報告ののち、会則の審議及役員の選出があり、矢野常務監事から母校の近況報告があった。

新役員
支部長 龜井謙太郎

千里山昭八会

副支部長 川上圭一 野村 吉治
八月八日(水)午後六時より淡路島を指呼の間に望み得る舞子荘に於て第四十二回例会を開催。

暇のある者は正午過ぎから家族連れにて水清き舞子の浜に都塵を落す者も多く六時迄に家族も加えて二十三名となつた。六時五十分より開会。幹事より報告事項があり、次で今秋改選の母校評議員の推薦の件が議題に供された。

議事を終えて小宴に入る、今回は全く家族会の観を呈し、家族からも種々と隠し芸が出て、実に和やかな雰囲気を出した。淡路島の夜景も寝ながら、懐旧談に花を咲せる者が多かった。

清らかな夢に一夜を明した一同は九日午前十時散会家路についた。

出席者
西村善雄 中家利國 北村文之助 結城丙太 多賀恒一 竹藏辰造 吹瀬義臣 山内喜一郎 田辺卓起 浦野健二郎 大島武夫 中江興 木下忠夫 中村重男 平井三朗 外家族八名

神戸関大倶楽部主催
福地判事・中藤検事
山本刑事部長栄転歓
送迎祝賀会

神戸関大倶楽部では今般

当倶楽部の会員判事福地壽三氏が神戸地裁明石支部より本庁に、検事中藤幸太郎氏が山口地検次席検事に、生田警察署長山本春治氏が兵庫県警察本部刑事部長にそれぞれ栄転されたので三氏の栄進に祝意を表する為、去る八月八日(土)午後六時より北京楼に於て歡送迎祝賀会を開催した。炎暑の折にも拘らず参会者多数、九時頃盛會裡に散会した。

出席者
米賀側
福地壽三 中藤幸太郎 山本春治
会員側
山崎敬義 原田龍太郎 高橋篤久次 西村治三郎 向井裕亮 水本信夫 灘波方 水本千代松 星野正身 岡田退一 大塚俊勝 岡本徳 赤井定雄 中巻弘 橋本太一 森文雄 角田好太郎 大野幸雄 渡辺勇男 小川立朗 吉田貞彦 飯沼健二郎 井澤國雄 坂本正夫 野田俊春 岡田芳太郎 佐藤幸司 木村正 平島廣

昭和31年 校友名簿

昭和28年度版を増補・改訂しました
同窓との親睦連絡にぜひ御利用下さい

—収載人員二六、〇〇〇余名—

申込先

關西大學校友課
大阪府大淀区長柄中通二丁目
振替 大阪 二二八七五番

B5判 六〇〇頁
実費頒価五〇〇円
(送料当方負担)

關西大學 法學論集

創立七十周年

記念特輯

(執筆者)

岩崎卯一 中谷敬壽 池田榮 堀堅士 内田修 植田重正 中義勝 和田豊二 木村健助 福島四郎 明石三郎 西本寛一 池垣定太郎 岩本慈 石尾芳久

三四九頁・かがり巻表紙
頒価 金三百五十円

關西大學 文學論集

創立七十周年

記念特輯

(執筆者)

井上吉次郎 岡野留次郎 大小島真二 田中照 秋山博愛 魚澄惣五郎 末永雅雄 高橋盛孝 藤本勝次 三上彌雄 横田健一 飯田正一 澤瀉久孝 金子又兵衛 吉永登 大西昭男 小野勇 進藤浩二郎 玉木意志太郎 角田文雄 広瀬捨三 堀正人 山本榮一郎 三木治 見次直雄 橋田慶蔵 石浜純太郎 広岡英雄 星野信夫 小方厚彦 堀本喜之助 入江深 河村信一

七二〇頁・かがり巻表紙
頒価 金七百円

關西大學 經濟論集

創立七十周年

記念特輯

(執筆者)

高木秀玄 市原亮平 三谷友吉 澤村榮治 杉原四郎 齋方貞亮 矢口孝次郎 荒井政治 東井正美 森川太郎 松原藤由 越後和典 宇田米夫

二九〇頁・かがり巻表紙
頒価 金三百五十円

關西大學 商學論集

創立七十周年

記念特輯

(執筆者)

山崎紀男 賀屋俊雄 今西庄次郎 河村宜介 板橋菊松 鮫江城夫 植野郁太 酒井文雄 河合信雄 安田信一 河野 稔 幸尾晃洋 柏尾昌哉

二七一頁・かがり巻表紙
頒価 金三百五十円

關西大學 法制史學會 共編
關西大學經濟學會經濟史研究室

大阪周辺の村落史料

A5判 フランス綴箱入

本書は關西大學圖書館に所蔵されている貴重な村落史料のうち、庄屋文書といわれる庄屋の蔵に放置されていた記録を纏めて、法制史及び經濟史は勿論、一般史学やその特殊部門の研究に寄与せんとして公刊されるものである。

庄屋文書のなかには、庄屋自身の任命、退役から、触、遼、回状、農民の五人組、宗門改、検地、耕作、年貢、水論、新田開発等は勿論、田畑建物の売買、質入、奉公人、人身売買、縁組、相続、遺言、往来手形、寺送り村送り等に至るまで、百般の法律行為に関する文書までが保存されているので、近世農民の法律および社会經濟生活はこれらの史料によつて明かになるであろう。

第一輯 (庄屋文書)

二二〇頁 頒価 金四〇〇円

既刊

第二輯 (耕肥、拝借銀、頼母子)

一七〇頁 頒価 金三五〇円

既刊

本輯に選んだのは、農耕の基となる肥料と、その購入資金と入手方法にまつた農民の努力と法律關係、および金融、とくに御発起無尽と称せられる藩政頼母子の運営等に関する書類である。

第三輯 (証文集)

約一七〇頁

近日常

(なお御入用の方は大學出版部へ直接御注文下さい)

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十一年九月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報

第二九五號 九月號

關西大學出版部

大阪府大阪市長柄中通二丁目

発売所

關西大學

發行所